

# 広島語り部

終戦から70年が過ぎようとしている今、沖縄では「ひめゆり学徒隊」の語り部による講話が終わり、全国的に被爆者団体の解散が進むなど、自身の戦争体験を語れる人がい

なくなる日が近づいている。薄れゆく記憶をいかに受け継いでいくか。被爆地・広島では、若い世代による新たな取り組みが本格化している。(古川幸太郎)

## 次代のカタチ

### 被爆70年



若者と被爆者が気軽に対話するイベント「はちろくトーク」=6日、広島市。伝承者として活動を始めた奈良県の  
大田孝由さん(中央)と被爆者の梶本淑子さん(左)

## 肩肘張らずトーク形式

ジャズが流れる広島市内のバーに、司会の女子学生の声が響いた。「今日は私たちのちえばあちゃんのお話です」。広島原爆の日の6日に開かれた「はちろくトーク」。被爆者と若い世代が気軽に対話するイベントで、20代前後の若者約1

20人が集まった。学生有志による自主企画だ。「下級生の顔は膨れあがつて誰が誰だか分からなかった。校庭で穴を掘って火葬した骨はピンク色だった。この記憶は頭の中から消したくても消えない」証言したのは、爆心地か

ら2きで被爆した切明千枝子さん(85)。一方的に語るのではなく「ちえばあちゃんはどう思った?」「何してたの?」と司会が質問を交え、トークショーのような雰囲気が進められた。はちろくトークのもう一つの特徴は自由討論。体験

を聞き終わると、テーブルを囲む5、6人が一組になり、安全保障関連法案や平和教育について意見を交わした。「戦争をリアルに感じられた」「誰かが平和を保障してくれると思っていなければ、私たちが考えなければ」「友達にも伝えたい」。真剣に語り合う若者たちの様子を見ながら、切明さんはほほ笑んだ。

## 証言聞き取り「伝承者」

広島市が3年がかりで養成した「伝承者」の1期生50人が4月から、舞台に立っている。戦争体験者から聞いた証言を、平和学習やイベントで語り継ぐ役割を担っている。

その1人、奈良県の大田孝由さん(68)は広島県出身。幼少期に関西に移り住んでからは、母から「広島か

ら来たと言っはいかん」と口止めされ育った。母は亡くなり、結局、被爆体験を聞くことはできなかった。心残りだった。小学校教諭を退職後、「広島のため何かしたい」と考え、伝承者養成講座に応募した。

た。本当の気持ちを伝えられるか、何度も悩み、立ち止まりながら書き起こした証言は約1万字に及んだ。梶本さんは自身の思いをつなぐのは難しいと思っていた。それだけに大田さんの語りを聞くと涙があふれる。「私の気持ちを代弁してくれている。気持ちは通じている」

## 体験を集めネット発信

デジタル保存も進む。広島女学院高(広島市)の生徒たちは首都大学東京(東京)と5年前から連携し、インターネットで被爆者の声を視聴できるサイトづくりに取り組んでいる。

抱いた生徒たちは収録にいつそう熱を入れ、今年に入ってから半年の間に16人の証言を集めた。修学旅行生の平和学習やスマートフォンを活用した発信など、次のアイデアも続々と出ている。

生徒が被爆者にインタビューし、20分に編集してネット上にアップ。爆心地からの距離が分かる立体的な地図に、顔写真を付けて紹介している。画面は洗練されたデザインに仕上げた。

2年生の並川桃夏さん(17)は活動を通じ、曾祖母(90)の入市被爆の事実を初めて知った。体験を話しながらなかった曾祖母から「聞いてくれてうれしかった」と感謝されたという。並川さんは「言いたくても言えない人がいる。体験を残すために、私たちにできることはある」と力を込める。

今年1月、証言を依頼していた被爆者が収録前に亡くなった。聞きたくても聞けない日が来る。危機感を

持った。聞きたくても聞けない人がいる。体験を残すために、私たちにできることはある」と力を込める。